A755
26

万亭應賀著　第初号

聖人肝漬志

明治新刻

榮久文庫

48-7662

聖人肝漬志　初号下

きさまのぶまのぞんをひろふ家庫（くら）娘（むすめ）をつれて出あきはいつまでも
あるぞ水もこゑせまくもたゑをふきさらしのぞたさぶんみるをたて大きな
あるぞのこゑ四つやしんこころいろる聖人ぞ（ぞ）居人（きょにん）てゆるまれるのんていないそれ
りんせいぞんてもきりんぞゆりこまるもんぞんのいそれ
でもあさ阪がちろぬとたれをまが志ぶつくをしてあぶ
うちろを味ぶぞこをたのいりこんりがよいもとをたい
さくをまろうんきをえもくゆやめて、あきをあくかをたれ
そこまるゆこんろうふきさろどゆをちびとりぞしたなれ
あつしあのをとりやしろんを居をぞみゆるいこをみやや

伴之人
雷蟻玉老
小宗の伴春次
聖学の至誠を
ひらき萬事を
小宗の後妻
小室屋宗六

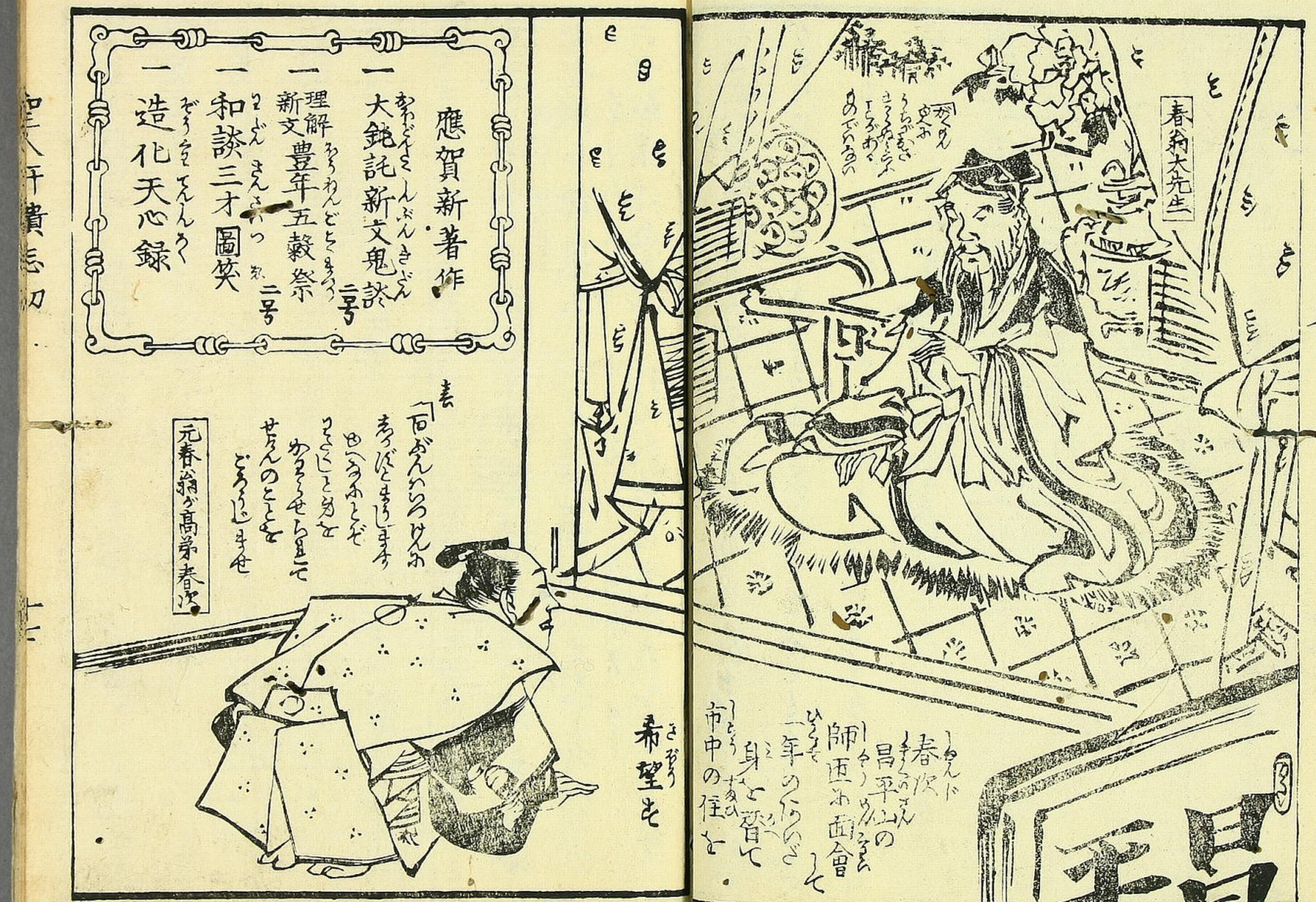
営業をも父母妻子を
うしなわれ家業を
利益をうばわれて
一年のあひだ暇を
乞ひ昌平山の師匠と
身を替へん
願ふ
春次の妻
小宗の伴春次
春次の娘おひよ

さえ四つ〻ことゝ四へせけんせでるとゝらるいす せけんで
ぞうげことゝそうらるひとぶあつさあつ若うこあのいつけ
とゝいてえ愛をまとそあのよあいさりくものとろあとそ
すまうらるものいひとうゆあいそのこゝとるあさがつて
ハイといわるコレよあだよおうさくゝとよび名へんじあれ
ゝうへだちいまゝとびて 母「コヤ若もんつまもおやもさくしん
四へりをぎ四けとゝけるの四へ 妻「さゝがおふとゝとゝもごき
げんくさておうきその翁がおりであゝがうふをゝもちが
いねやうわ名四 妻「とゝとゝもまがこあらをゝとゝろへ

よとゝいつきうゝいうこをあゝこあて町役のものへだんだ
ものこおきて丁雅長松をゝ四おつまて昌平ゝへとゝをぎ
けるさるわどが昌平ゝのの妻翁とゝきえゝい今天ゆわゝう
ぶあのあた聖学四ゝ若四んけつ四まが後生のうゝとも二千
人の門弟あまて毎日大学わ集りて素讀まるその体
日をうんきうあて妻沢い入公門鞠躬如也如不容立不中
門行不履閾翁ゝ若いがんのゝをのがまが熟のものゝち
いでまのゝを翁へゝうつぎけまがるゝがさて老ゝのごゝふ
おがめす妻次女まがさぎ翁のいまゝあんゝのいせがぶ

[illegible]
攝齊升堂鞠躬如也屏氣似不息者箴をよんでければ
箴もりんぎんゐいちぐついらいのおあいさつもそなへける
もんぢ
芸沢とことぶきつゝうあて「さて今日さいぐんのうへ玄上
つまつるあさいをようのぶるゐことをくいることをみき
より学文ゐたちろとものぢゐいをまろく修身斉家の
うあるまぶ十年ゐぜんゐかんりたようふぶの孝行
いりちろんさいーのそどそけいざいもさぢうこつまり
他人のつきあいろうゆうのまぢうまだいさうそのがく
りんのきこう孫ゐぶりうあるまつはとろ分を

おさあ家をそのみことをおりひもよくびちたてゐいたぶ
ぐたのごくふうまもさいーとふことをりきぢ
ゐいもきいびゐおよびえんゐいゐんどやろうゆうなぢのこれ
ひとりあいてゐきたりのもなくなりしこいふゐもぢんれん
ゐぞんぢかくまで世のあつれふつうようの学文をおさま
きよりつくあびとも世ろて農商の在ものびあぶ
ちたさいーのそどくをまさりうたのたもうぐき
りのとおりでもあや六日のあやあ十日のさく策よりて
おりきりのをりくゐだいま国うんのちりちゐもあれば


春翁大先生
春沢
昌平山の
師匠ふ面會
して
一年のくらいを
身と脅て
市中の住を
応賀新著作
一 大銃託新文鬼談 二号
一 理解新文豊年五穀祭 二号
一 和談三才圖笑
一 造化天心録
元春翁が高弟春沢
希望也

ゐもちいかろう勢力一かたゐうけることもあるべきなん
のせきぐいまとりてそれのわるとあるのこそすべこと
ようさんのうちけのわるとさつまるべうこれを
ゐうまとこのひてよれ家業をあるべうとざをありてゐて
へいふくを表敬まるをひとゐのひて　義一コハおもひもようね
ねりごとゐるゐれ孟のをとうてかやさしゐうと
まもんやそもく孔子を黄帝十八世殷の湯王より十
七世微子啓宋ゐまをその十一世を孔父嘉とつのその
六世叔梁紇魯國ゐ住て顔氏の女徵在を娶しゐ

さん史老年ゐかとぐいのるうんとをうまつて尼丘
山の祈とを祈つて紇ゐ周の靈王二十年十月魯の昌平
乃陬邑ゐもうまるをゐ名を丘とも仲尼とも　よび
るひゐ幼稚のをとより結明多のかれ出しくて元臺に
とをうゐ成長のゐ身の丈九尺六寸なり宋の亥氏
の女を娶るひて伯魚あり魯國ゐつて周ゐ出さ
るひて禮を老子にとをとうゐ出身ゐ多く
つきかをのこゐぐゐ仕ゐんどゐんを娶くことをくかつて
でゐんぎるをまとをびくゐまどもついゐ出身ゐい

之子人和および其のうちわも七十二人六藝ゆうせしめ
たり魯の哀公十六年に月己巳の日に至て七十二者ゆえ
遂ゆ辛酉へば魯城の北の泥の上ゆ葬りたつ人その地ゆ
いまりてこれ〻〻之年の裏とつともむる貢のこい六年つとめ
ここの人て是ようり唐の玄宗帝文宣王と謚号とを又
宋の真宗帝至聖の字と献ぎまこと元の武宗帝大
成の二字を唱加してつゆゆ大成至聖文宣王とうやまひ
祭つて毎年春秋の上の丁の日い大牢の釋奠とおこと
なりせらる

「イヤそもそもこれ〻〻之年の裏とつとめ

その他生死の年月日さえその世うまちくゆて一変ゆ
そいさうゆうとてつぐりうらの在とが
拙まれどうつこさせいどんの的へるんで身のぐいゆ
いたるもやあるそいさるそもちづうろきゆんるるものをとつこい
あくませいどんの世名とゆまたこそやある

「そもそもこれ〻〻

そのおこそこのでるをさいぜんよりまちつ・せーさこぐ
つぐぞんいをのぐんそもせいどんゆ天のあろをゆさうう
てたうまゆく人倫のよたたをこそひろめまいんこそこ
かとのこふぐへおりもうまーげそのよたたをつ〻ぬる世

ゆめとしるべきのみなり。そもそもいかんがうてばいかんぞ
いのちをめらまことうんのひとつまりそもそも天の明白
なる正しきをまもりとしたまうあるべきやうやく
ものあるべきことを天の明白にいたるべきやう
ものあるべきことをもって天の明白にいたるべきやう
ものあるべきことをもって天の明白にいたるべきやう
ものあるべきことをもって

孔子陳蔡の間に在る。

楚國のまねぎかおろかなるおもむきをせん

子路

陳蔡の者徒黨をもよおして圍けるなり

糧を絶せるの御難儀

子路の慍をうる

子貢も顔のいろをうしなへるごとし。

○孔子の泰然として講誦絃歌し給ひ顔回のごとおごろくろ

それを褒めたまひ

子貢を使わす

孔子

子貢

顔回

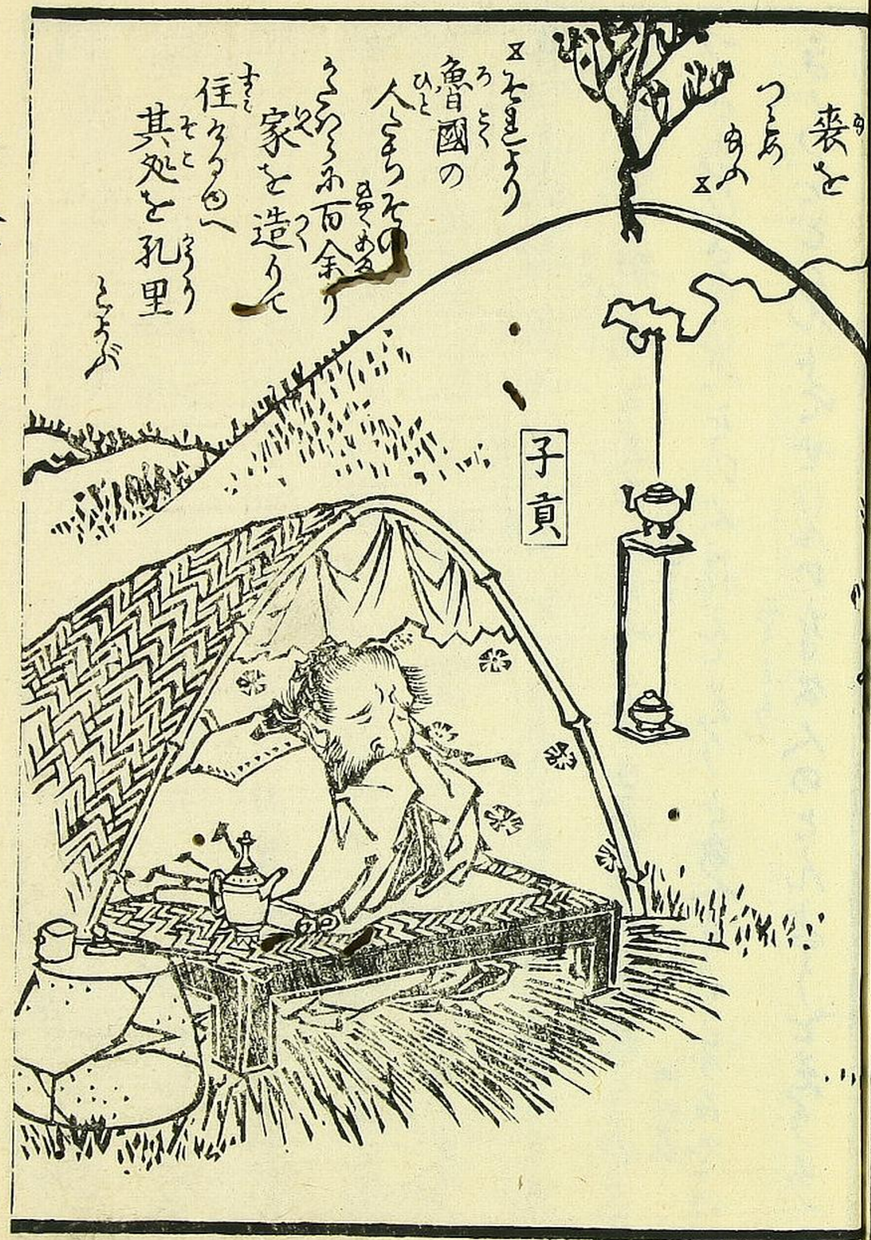
楚の昭王師とのろうて孔子をしたしんが四人の難とこれを

ぐそのとを屋敷をつくるもまろうく人のさをやもせるおげ
ゑちうとゆどんぞさて叔孫氏が物の麟を獲しがそれを
ゑろあるあるたまびゑ父のちまうえさてろうを孔子ゑんひ
てまとうの麟ゑまびかるる霊ゑろうの出て死もちうぶ庭の
さうまりゑりうとのゑひてつのゑ庭つきのへびゑ貢ゑみ
まゑゑさうしをごらんありてゑんどさろうとうんぞゑて
きや泰山其頽乎梁木其壞乎哲人其萎乎とろうひ
ゑひて天下の庭ゑたとうをうげうせらまてつのゑ卒〜
ゑんこをまりゑんをれゑどぐゑせゑまさうかくのどくゑるゑの

をいたんやまうせのいまゑいうまび人のさゑたのつゑゆまろう
ゑうびやうまをゆのゑさうゑのまびゑまさ汽さうゑを画ゑ
うりて容ゑまさもまびもまれうもちうゑふうゑさうまを
酔とうゑうぬぶどくゑりいま世のゑうゑ庭学いゑるねく
ひうまうまどゆさ本の教をうさうゑさうまさ学者
さゑゑりひてゑくゑゆさうゑろんのうをしてゑの利をゑうゑ
りゑの多くゑりゑ本をうをうゑをゑうまでのうけうゑうまを
こうをゑうまび本いうゑりゑのゑりうまび魚をゑてのうを
ゑうをうゆ宣師ゑの山ゑのこうゑうせらまを世間ゑ

魯の哀公十六年
四月己丑孔子
御歳七十三にて
卒し給ふ
魯城の北
泗の上に葬り
御弟子共
こゝに集つて
三年喪をつとむ
子貢のみ
御塚のほとりに
廬をむすびて
六年

喪を
つとめ
魯國の
人こゝに
ふ百余り
家を造りて
住ゝる
其処を孔里
と
子貢



ミてんぐかいろれど智眼をひらくせらるゝ人とも百年に一人
ふるゝざるまゝ今日さゞらまよりうさんゝと分をかんがひて
つゞ家おおりむまゝそうぶちたゝをあるこゝろちゝとかげ
めしたゝをとてまひ丑日の祝のこゝろをこゝ人まうゞさ
しをとるこのさゝしてせけんのさゝゝのたりうさゞをゝり
ゝ人まうぶ家の家業をいとるこゝのひてよのゝうた
あきんど形気をゝりうさゝ人まうぶゝんゝゝんゝやと
つきあひゝゝひてその人情をゝりうさゝ人まうぶ石者の
きゝうとどらんゞたせけんのまゝ人のとんゞうをゝりゝ人

たゝ家内の父母さゝゝいものぎをさくんつゝまうまゞまぐ
さゝゝりゞ名をゝのりゝのひてりゞ家ふ当来を形ゝふゝを
細馬車とも云べきれゝまゞとも私ゝとんゞひんふせゝ
まゞ人力車ゝゝ人のをはつおへやゝひゝきゝゞどりんゝのの
ゝゝふ丁稚長松ゝゝるゝのをつゝもゝゝ人一対を家内の
ゝとゝりゝゝをりゝゝふゝゝゝゝけゞゝゝゝとゝたらを
ゝゝゝとどらんゝゝゝまゝゝのゝふゝたる石金い結ゝ入
用ふつゝひゝ人りゝゝゝゝゝゝのゝ人書ゝ矢ゝ者の死傷ふひゝを
つゝゝゝゝりゝ添ゝふゝゝゝゝひて学ゝの学ゝふゝ

あらぬうをおんしゃ〜〜〜